

日韓異文化コミュニケーションの一研究

——在韓国日系企業のアンケート調査より——

大 崎 正 瑠

目 次

はじめに

- (1) 日本人用アンケート総括
- (2) 韓国人用アンケート総括
- (3) 韓国における「ウリ」と「ナム」

おわりに

はじめに

異文化コミュニケーション研究の難しさは「理論」と「実践」のバランスの確立である¹⁾。多くの学問において「理論」のない「実践」は危険であり、「実践」のない「理論」は虚しいと言われる。近年の日韓異文化コミュニケーションや日中異文化コミュニケーション研究においても、たとえば儒教や仏教を軸にした理論研究も見られる。しかしそれらの研究者は、せいぜい数日間旅行者程度に行ったことはあっても、それなりの期間を現地に滞在したことはあるのであろうか？このようなことは虚しいことである。それは現実を知らずして理論が先行するあまり、文字どおり現実離れしているからである。筆者は、日韓異文化コミュニケーション研究もまた、まだまだ現地に滞在し、観察や直観により様々な事象を知り、根底には何が横たわって

いるのかを検討する段階を脱していないと思う。理論研究はそれからでも遅くはない。

筆者は、今回2005年8月1日から9月1日までソウルに滞在し、在韓国日系企業内で働く日本人および韓国人の間におけるコミュニケーションについての基本的な項目に関しアンケートを試みた。さらに韓国人のコミュニケーションに密接な関係がある「ウリ」と「ナム」すなわち「ウチ」と「ソト」についてのアンケートも行った。これは筆者が長い間辞書的定義以外に韓国の人々がどう思っているのか知りたかったからである。

今回の韓国滞在は、筆者にとって10回目であった。まだ戒厳令があった1975年(2回)のが最初の訪韓である。筆者がその時滞在したホテルはもはや存在していない。その後20年の間隔はあるが、1995年から1~2年に1度くらいの割合で訪韓している。

まず2005年7月中旬から下旬にかけて事前に国際郵便により在韓国の日系企業40社へアンケートを送付し回答を依頼した。回答の送付先は筆者が1か月間滞在したソウル江南に位置する長期滞在型ビジネス・ホテルである。40社は、2003年夏に「ソウル日本人会(Seoul Japan Club)」から入手した『分野別会社名簿』

により日本人従業員と韓国人従業員の構成（人数）を考慮に入れ、かつ分野を分散しながら無作為に選んだものである。回収の方法は、上記ビジネス・ホテルに滞在中、40社に電話や電子メールで問合せながらソウル市および隣接の仁川市に所在する最終的に8社から直接または郵便によりアンケートを回収した。一部の企業からはヒアリングの機会も得た。

回収率は、必ずしも良くなかったが、その理由としては、まずアンケート自体が該当者に届いていない場合があった。次の最初の二つがその理由である。

①2年前の住所のため移動先不明により返却されてきたものが4社あった。これらの会社は現地では電話もよく通じなかったが、帰国して明らかになった。

②所在地の変更がないものの、アンケート自体を受取っていない会社が数社あった。そのような会社との電話などでは、受取人名を書いていると郵便物が社内で行方不明になることがあるという説明があった。担当者が分からないまでも社長宛くらいは書いておくべきだった。

アンケートは届いていたが、回答が得られなかった次のような理由があった。

③同一社内にあつて、日韓異文化コミュニケーションという回答しにくい微妙な内容を含んでいるため、回答自体を躊躇している場合があった。夏の労使交渉期間の直前でさらに微妙な時期という会社も数社あった。

④8月13日から15日まではお盆休みで、従業員に精神的時間的余裕がない。前後を含めこの期間韓国人従業員は故郷に帰り、日本人従業員にも一時帰国者がいた。

⑤8月15日という韓国の独立記念日を控え

ており、時期的に微妙であった。

⑥書かせる質問が多く、もっと選択方式にすべきであるというアンケート技術上の問題があった。

⑦韓国は、すでにかなり成熟した社会であり、先進国に近づきつつあると見られるため、他の発展途上国に比べこのようなアンケートに必ずしも関心がない。

以上の反省点があるが、それにも拘らず20%の8社から回収できたことはまずまずの成果であった。回収の内容としては、日本人用だけを回収できた場合、韓国人用だけを回収できた場合、日本人用と韓国人用の両方を回収できた場合がある。日本人用と韓国人用のアンケートには、1社から複数回収できたものもある。また韓国人用のアンケートには③と④を記入していないものもあった。

本来は協力頂いた企業名を最後に記し、謝辞を述べるべきであるが、今回は大半の企業が社名を掲げることを希望していないので、社名を挙げないことにした。

(1) 日本人用アンケート総括

回答者は、男12名、女2名。年齢は28—66歳まで広がる。回答がない項目もある。

①日本人と韓国人の構成

日本人が代表を務めることが多く、日本人1名か2名が一番多かった。韓国人は15名から3700名の間に分布している。その他（日本人・韓国人以外）はいずれも皆無である。

②オフィスの構造

回収したアンケートではいずれも大部屋であ

(1) 日本人用アンケート内容：原文は日本語

2005年 月 日
男・女／年齢 才

① 貴社の日本人と韓国人の構成

日本人： 名 韓国人： 名 その他： 名

② 貴社のオフィスの構造はどのようなですか？ どちらかに丸をつけて下さい。

大部屋（従来の日本式）／個室型／その他（具体的に書いてください）

③ 会社内で同僚の韓国人とコミュニケーションがいかない場合の事例を挙げて下さい（複数可）。またその原因は何だと思えますか。

④ 会社内で同僚の韓国人とコミュニケーションするにはどのようにしたらよいかと思えますか？

(2) 韓国人用アンケート内容：原文はハングル

2005年 月 日
男・女／年齢 才

出身地：

京畿道／江原道／忠清北道／
忠清南道／慶尚北道／慶尚南道／
全羅北道／全羅南道／済州道／
ソウル市／仁川市／釜山市／
その他

① 会社内で同僚の日本人とコミュニケーションがいかない場合の事例を挙げて下さい（複数可）。またその原因は何だと思えますか。

② 会社内で同僚の日本人とコミュニケーションするにはどのようにしたらよいかと思えますか？

③ あなたにとってウリとはどんな人達ですか？ ウリとはどんな付き合い方をしますか？

④ あなたにとってナムとはどんな人達ですか？ ナムにはどのような対応をしますか？

る。部屋の中に仕切りがあるとの説明のあるものが1社あったが、これも大部屋の一種と考えられる。アンケートの対象企業が、日系企業のせいかもしれない。日本ではおおよそ大半は大部屋であり、筆者がかつて調査した中国企業は大半が個室型であり、中国人が日本人よりかなりデジタルであることが窺えた。これは韓国人がどの程度デジタルかどの程度アナログかを知

る手掛りになるが、純然たる韓国企業ではないので、早急に判断はできない。

③ 同僚の韓国人とコミュニケーションがうまくいかない場合の事例と原因。

同じような環境にある限り、当然ながら回答に重複するケースが多い。無回答も相当数あった。大きく分けて日韓に特有な内容と、日韓に限らず日米でも、日中でも、あるいは米中でも有り

得るいわば普遍的な内容とがある。幾つかあるが代表的なものを挙げてみよう。

- ・お互いに相手の言語が不得意な場合、コミュニケーションがうまくいかない。
- ・日韓の価値観が異なり、課題の優先順位に相違ができる。
- ・韓国の常識と、日本の常識には「ずれ」があるので、どうしてそうなるのか分からない時がある。
- ・自分の指示のまずさ、相手の経験不足、理解不足がある。
- ・相手と融合できず、相手に違和感を与える。
- ・ほとんど問題ないが、自分の大阪弁が理解されない場合がまれにある。
- ・思考方式の違いや習慣の違いでどうしても理解しえない場合がある。
- ・日本語の技術用語には、特殊な言い回しが多く、別の日本語や英語でも表現してみるが、難しくて伝えられないことが多い。
- ・基本的に日本語なのでほとんど問題ないが、難しい故事成語やカタカナ語は通じないことがある。
- ・専門分野（技術）について話し合いをするとき、お互いがもつ知識レベルに差があるときにコミュニケーションがうまくいかないことがある。
- ・何かにつけ「日本では……」を連発する。これを頻繁にやると、相手に反発を招くことになる。
- ・日韓には歴史的問題がある。
- ・事前に計画を綿密に立てるか（日本人）、勢いをもって実行するか（韓国人）の意識の違いにより、コミュニケーションがうまくいかない場合が多い。

- ・日本人から見ると会議などで整合したのに、なかなか物事が進まないのでもやきもきする。しかし締切りが近づくとサッと仕上げてしまう韓国流のやり方に当惑する。
 - ・社長からの指示であれば実施するが、それ以外はあまり指示を重要と思ってくれない。トップダウンの傾向が強い。
 - ・依頼した事項を期日までにやってくれなく、何度も同じことを言わなければならない。
 - ・自分の考えを中心に物事を判断する。また曖昧な判断を嫌う国民性があるので、できるかできないか分からないのに、「できる」と断定する表現で返答をする。
 - ・第三者のことについて尋ねる場合などで、しばしば自分の主観を交えた意見をいうので、誤解を招くことがある。
 - ・開発の担当者などに今行っている業務の趣旨や目的を尋ねても、明確な返答がない。自分がその趣旨を理解しないまま上司の指示に従っているだけで、またこの上司もさらにその上司の指示に従っているだけのようである。
 - ・プロセスより結果重視の社会であるため、また上下関係が厳しい社会なので、自ら考えると言う習慣がないように思える。
- ④会社内の韓国人とコミュニケーションをうまくするにはどのようにしたらよいか。
- ・韓国語を修得して韓国語でコミュニケーションができること。
 - ・日本語で話す場合も平易な日本語で相手が理解しやすいようにする。
 - ・韓国人には日本の習慣を教え、自分は韓国の習慣を学ぶようにする。
 - ・日常の対話を欠かさないこと。

- ・相手の話をよく聞くこと。
- ・日本人であることに固執せず、相手に視線を合わせる。
- ・自分の実力を誇示することなく、自然に相手を感じ取るようにする。
- ・韓国の歴史を十分知り、相手の立場で考えてみる。
- ・人前で叱らない。面子を傷つけることになる。
- ・怒る時、誉めるときは適宜にその場で行う。後から言ったのでは効果がない。
- ・感情はその場で出した方がよい。
- ・「ムチ」だけでなく、「飴」がかなり重要である。誉められることを好む傾向がある。
- ・「察し」とか「腹芸」は通じないと思った方がいい。自分が思っていることはその場で出した方がいい。
- ・日本人のメンタリティ (ものの見方) について粘り強く話し理解してもらう。
- ・自分も日本人として韓国人のメンタリティについて学び理解に努める。
- ・何でも正直に話し合う。
- ・酒の席で腹を割って話す。
- ・日頃から絶えずコミュニケーションしておく。
- ・日本人のように曖昧な表現を好まないため、自分の意見を述べる時は、はっきりと言うことが必要。
- ・曖昧な議論を避け、具体的に自分の意見を示す。すなわち、ある事案においては、具体的に自分がどうしたいのか、相手に何をしたいのかを細かく話す。
- ・他人の意見に従う、または流される日本と異なり、韓国人は良くも悪くも自分の主張

が強いため、衝突は避けるように配慮している。

- ・相手の話を聞く場合は、相手が何を言おうとしているのか、一つの事象だけで判断するのではなく、多角的に尋ねてみる必要がある。場合によっては、こちらから聞いた話を纏めて確認してみる。
- ・お互いが理解しにくい時、時間や場所を変え、再度コミュニケーションを図る。時には焼酎を飲みながらコミュニケーションを図る。
- ・酒を飲みながら話を聞くと相手の本音が聞ける。

(2) 韓国人用アンケート総括

アンケートがハングルであったので、回答もハングルで書かれている。日本語に翻訳した主なものを下記に掲げる。なお回答者の内訳は、男 21 名、女 12 名。年齢は、24—54 歳まで広がる。出身地は、京畿道、忠清南道、慶尚北道、慶尚南道、全羅南道、ソウル市、仁川市であった。ソウル市と仁川市は特別市であり京畿道ではない。アンケート回収の時に応対してくれた社長や担当者のお話では、従業員の中には少数ながら北朝鮮出身者もいるとのことである。そのような人は口頭で話を聞く機会があったものの、特にアンケートには応じていない。

①会社内の日本人とコミュニケーションがうまくいかない場合の事例とその原因。

- ・すべての面で円滑なコミュニケーションができていないと感じている。
- ・全体としてコミュニケーションはうまくいっているが、たまに日本人がイエス・ノー

をはつきりせず困る時がある。

- ・特にないが、言語能力の不足がある。また文化の差で同じ言葉であってもお互いに認識するものが異なることがある。
- ・日本人は、緻密で注意深くて余裕がないと思うが、反面過ちもしないので見習う点も多い。
- ・日韓の言語の差が障害になることがある。
- ・情緒・感情の違い。
- ・対話の断絶。
- ・市場状況の違い。
- ・韓国と日本の環境が違うので、相手に対する理解が足りない。
- ・日本人に融通性が足りないと思う。
- ・複雑な業務内容について話す時困ることがある。
- ・お互いに言語能力が足りない時に困ることがある。
- ・通訳を通して対話するので微妙なニュアンスが伝わらない。
- ・韓国人と日本人が共に英語使用の場合は、両者にとって外国語であるため、ニュアンスに違いがでる。
- ・両民族の特徴すなわち思考方式が異なる。
- ・日本人（日本語）に本音と建て前があるという言葉に先入観をもつためか、相手（日本人）の本音がよく分からないと感じる。
- ・微妙な語彙の違いにより誤解されたり誤解したりする余地が常に潜んでいる。
- ・口調あるいは表現により意味の伝達があいまいなことがある。たとえば、「考えておきます」は、日本語では否定的な意味であるが、韓国では肯定的な場合が多いと思われる。

- ・日本人が社内で検討した内容や結果などを韓国人の顧客に伝える場合、自分達は韓国の国のことを十分知っていると思っているが、実際はそうでもないと思う。数十年韓国で生活してきた韓国人の情緒を何年間かの韓国生活で理解することは不可能。両国には社会、文化、礼節、業務方式に差がある。

②同僚の韓国人とコミュニケーションがうまくいかない場合の事例と原因。

韓国人同士は特にコミュニケーションがうまくいかないことはないと考えたためか、圧倒的に空欄が多かった。回答の中には、韓国特有のものや韓国でなくとも日本でもその他の国でも起こりうる内容がある。日本と比べるとやや横の連絡が悪いという印象を持たせる内容がある。

- ・韓国人同士であっても思考方式（サコバンシク）が異なる場合がある。
- ・各自の考え、個性の差、方法上の問題でコミュニケーションがうまくいかない場合がある。
- ・年齢や世代の違い。生活文化の違い。
- ・血縁・地縁などの差が出てくる場合。これは単に社内の問題ではなく、実は韓国社会の問題である。
- ・相手や相手の部署に関心がない時。
- ・お互いの理解不足。意見の差がある時。
- ・自分の所属する部署の立場および状況だけを考える時。
- ・相手の部署や相手の業務内容に詳しくなく、相手の立場とか理解不足の時。
- ・各部署間の集まりが多すぎて逆に相手部署の関心が薄れる
- ・事務所の雰囲気から対話が途切れるのは当

たり前である。ティータイムの時間も上司の顔色を見る。結局対話が足りない。

- ・同僚に対してお互いの問題点を探るため、あるいは自分自身の利益を得るために対話しようとする時うまく通じない。

③ウリとはどんな人達か。ウリとはどんな付き合い方をするか。

これも当然ながら重複が多いので纏めた。

- ・家族、会社の同僚、親戚、友達。
- ・自分を愛してくれる人々。
- ・一緒に同居してきた人たち、すなわち情を分け合った人たち。
- ・親密で、率直な関係にある人。頼みごとができる人。
- ・No と言えない関係にある人。せいぜい Yes, but... と言うことができる関係にある人。
- ・自分が所属している集団、会社、学校の同期、家族。
- ・同じ考え、同じ意志をもっている人。
- ・お互いに助け合える関係にある人。
- ・利害を共にする集団。
- ・韓国人・外国人の区別なく、同じ目標、趣旨をもって集まった集団。
- ・血縁や地縁（同郷者）の関係は変わることがないが、ある目的や目標のために生じたウリは常に変化する関係にあると思う。
- ・状況によって異なる。会社対会社の場合は、自分の会社。部署対部署の場合は、自分の所属する部署。部署内では自分の所属する課。
- ・会社のすべての職員。すなわち同じ目的をもって心を合わせて努力している努力している社内の全ての職員。

- ・自分の会社、役職員。
- ・自分と同じ考え方をする人。自分が所属している組織の構成員。
- ・自分と関連している人、たとえば職場では会社全体。
- ・さまざまな意味をもつが、一般的に自分と利害関係が生じた人々。
- ・韓国の国民全体。

④ナムとはどんな人達か。ナムにはどんな対応をするか。

これも重複する場合が非常に多いので纏めた。

- ・自分と自分の家族以外の人たち。他の会社の人たち。知らない人たち。
- ・家族、友人以外の人たち。第三者。
- ・気をつけなければいけない人。
- ・今まで縁がなかった人達。
- ・自分と利害が異なる人。
- ・自分と繋がりが無い人。被害も受けないし、助けも求めない。
- ・自分の会社では他の会社の人たち。自分の家族では他の家族。韓国人としては他の国家の人たち。
- ・自分を踏み台にして成功しようとする人。
- ・個人的に親しみが無い人。理解と気配りが無い。
- ・自分以外のすべての人（家族を含む）。自分とは年令、職位などにより違う行動をしている人。それらの人に対して自分との損得を計算しながら行動する。
- ・行動や考えが異なる人。自分にはそれほど影響が無い人々。無関心。
- ・自分にはまったく関連のない人。ナムには関心がないから彼らが何をしようとする気にならない。

- ・ウソをよくつく人。そのような人には形式的に接する。
- ・外国人，または自分の所属している集団以外の人。
- ・自分が所属していない集団。疎かである。排他的になる場合もある。
- ・行動としては，礼儀正しく，丁寧に，建て前で行う。冷たい行動。相手を理解するための努力（話を聴取し相手の立場から考える）と自分の考えを理解させるための努力（討論，コミュニケーション）が必要。
- ・「私」と「あなた」または「ウリ」ではない第三者。したがって「ウリ」に属していた人が「ナム」になることもある。
- ・「ナム」は，相手と利害関係が生じ敵対関係になると対決するしかないが，そうでない場合は，「ナム」はあくまで「ナム」なので，気にしない。
- ・自分と利害関係がない人たち。普段別に意識していない。ナムがどんな考えをし，何をするか自分には大事ではない。
- ・他社。しかし他社だからといって無視するのではなく，ライバル関係にある会社，同じ業界にある会社として見る。
- ・これには色々な意味があると思うが，そんなに遠い所の存在とは思わない。あるきっかけによって親しくなれる存在だと思う。
- ・「ナム」は自分と利害関係が成立していない人々。しかしこのような「ナム」もこれから将来に自分と新しい関係を形成する可能性もあるので，オープンマインドで接するよう努力している。
- ・ウリ以外のすべての人達。しかしナムがいないとウリもいないと思っている。たとえ

ばビジネスの顧客，競争業者，協力企業など。ナムをウリの中に包容できるよう努力すべきだと思う。

(3) 韓国における「ウリ」と「ナム」

韓国における「ウチ」と「ソト」の問題は，「ウリ」と「ナム」である。韓国人は「ウリ」の人々に対する場合と「ナム」の人々に対する場合とでは，コミュニケーション・スタイルを変える。

辞書的には，たとえば安田吉実・孫洛範共編『韓日辞典』（民衆書林，1989年）によれば，ウリは「我，我々，うち」，ナムは「自分以外の人，人様，他人」とある。

「ウリ」は，上記辞書あるいはアンケートにもあるように一番狭い意味は，「自分」であるが，一般には「我々」という意味で，ある集団を表す言葉である。これは漢字で表すことができない固有の言葉であり，韓国人の枕詞である。

韓国では，上から下に命令が下される縦糸としての権力社会に対して，横糸としての血族的繋がりがあると考えた。韓国は，まずは血縁を中心とした集団社会である。李王朝初期の15世紀頃から徐々に確立した父系血縁社会とは，ウリといわれる血族中心の集団である。ウリは血縁の近い方から，家族，堂内（タンネ：4代祖血族），門中（ムンチュン：分派祖血族），宗族（チョンチン：同本同姓血族）があり，これが「第一次ウリ集団」である。ウリの基本概念は，飢餓のときに助け合う「共同会食」（commensality）である。今でも韓国では，食事の時に各自が「取り皿」を用意せず，同じ鍋や汁から共同で食物を取る習慣がある。また韓

国の飲食店には一人では非常に入りづらい雰囲気がある。一人で入ると奇人・変人と見なされる。一人用のカウンターや「相席」の習慣がない。どこでも集団で食事をするのが前提である。血縁は貧しかった時代の生活保障あるいは外部からの攻撃に対する防御の役割を果たしてきた。

韓国人が最初に人に会う時には、まず相手の姓名と本貫を聞く。相手が自分と血縁的にどれだけ近いかわかるを知るためである。「本貫(ポングアン)」とは、その宗族の発祥の地を表す。姓名が「金(キム)」でも、本貫が異なる。有名なところでは、安東金(アンドンキム)、金海金(キメキム)、義城金(ウィソンキム)、慶州金(キョンジュキム)などがある。その他には密陽朴(ミリヤンパク)、慶州李(キョンジュイ)などがある。韓国には、同姓同本不結婚の原則がある。男女が知合いになると、同姓同本か否かにより、相手が親戚か恋人かが決まる。相手が親戚と分かり自分の思いが成就できない時には悲劇が起こることもある。1997年これは違憲の判決がだされ緩和されたが、慣習は急には変化しない。要するに韓国人は、同姓同本の宗族を巨大な血縁集団と考える。

「門中」というのは、日本でいえば豊臣秀吉とか徳川家康とかその宗族の「中興の祖」ともいべき人を分派の祖とする血縁集団である²⁾。宗族全体の中の分家である。また堂内というのは、高祖(4代祖)を同じくする血縁をいう。通常韓国における、法事はこの堂内単位で行われる。

血縁の外にあるのが、地縁・学縁である。地縁は狭い意味では同じ村とか同じ町の出身すなわち同郷者で相手の家族などを知っていればより親密になれる。しかし地縁は血縁のように

はっきりしていない場合もあり相対的である。たとえば慶尚道と全羅道との対立がある場合、慶尚道の住民・出身者同士がウリとなり、また同様に全羅道の住民・出身者同士がウリになることはある。相対的というのはこういう意味である。ソウル、釜山、仁川のような人の出入りが激しい都会では地方と同じような地縁感覚は難しいかも知れない。たとえばソウルを中心に今回のアンケートの中には、ウリに町内会を含めるというような回答がなかった。ただし都市対抗のような「ソウル」対「釜山」、「ソウル」対「仁川」のような状況になることはあるかも知れない。

歴代の大統領、最近では盧泰愚元大統領、金泳三元大統領、盧武鉉現大統領は共に慶尚道出身であり、今まで金大中前大統領だけは全羅道出身であるが、大統領選ともなると、主義主張ではなく、慶尚道対全羅道のように同郷愛に基づく地域対地域の対決になってしまう。その結果地域差別も生じた。新大統領が誕生すると、主義主張が同じあることが前提であるが、内閣中枢や側近には多くの血縁・同郷・同学を配して足下を固める。

学縁には、高校の同窓と大学の同窓がある。高校の同窓は地縁とも重なり、一般には結びつきが強い。高校の同級生は、青春時代お互いに親しく付き合い、あるいは競い合った仲であり、親密感が強い。また同じ高校の先輩の言うことは絶対である、という韓国人は多い。ソウルの名門高校として京畿高校や景福高校、慶尚南道の慶南高校など高校の学閥が存在する。同様に大学の学閥もある。ソウル大学、延世大学、高麗大学、釜山大学などの名門大学などの学閥である。しかし必ずしも高校の同窓より深い関係

とは言いがたく、時にはお互いの利害関係により結びつく場合がある。これは日本でも同じかも知れない。韓国の大学進学率は中学からは約70%、高校からは約90%で³⁾、大学の意味合いも変化してきている。韓国における大学同窓の意味は今後どうなるであろうか。

その他のウリとしては、男であれば軍隊時代を共に過ごした仲間、現在の会社の同僚、趣味仲間、若い世代では電子メールでコミュニケーションをする仲間（メル友）という友人・知人も含める。今回のアンケートに伴うヒアリングでメル友を含めるというのは新しい発見である。

ウリは全体としても相対的である。アンケートにもあるように、固定したものではなく、状況により伸縮し、その構成が変化する。まずウリは、平和で安定期には、自分、家族、堂内、門中、宗族、同郷、同窓、知人、民族と広がる。反対に混乱期にはこの逆の順序で縮む。

たとえば、かつて板門店で北朝鮮代表と韓国代表が厳しい交渉の時に、北朝鮮代表が「ソウルは火の海になるぞ！」と脅しをかけても、交渉が終わって乾杯の時には、彼らも恬然と酒を注いでくれ、にっこり笑うという。会食すなわち共同会食のときはウリ、少なくともウリ感覚となる。したがって会食の時に厳しい交渉やビジネスの話を行うのを嫌がる。これは日本人も頭に入れておいた方がいい。また交渉の時は「理」の世界、会食の時は「気」の世界ということが言える⁴⁾。

現在の韓国は1988年のソウル・オリンピック開催や2002年のワールド・カップ共催を経験し、今や一人あたりの国民所得も12,000ドルを超え⁵⁾、生活水準が向上し、先進国の仲間入り目前と見られる。筆者の印象としても、

1975年頃と比べてもちろん、1995年頃と比べても人々に余裕の表情が見られる。たとえば地下鉄などでも乗客は、昔見た光景とは異なり、降りる人を待って乗り込む傾向にある。横断歩道の前でも車は歩行者をじっと待っている。以前の状況を知る筆者にはいずれも驚きである。

このような状況から判断しても現在の韓国人は趣味仲間や友人・知人という人達をウリに入れる傾向が強いように思う。これは今回のアンケートやヒアリングに表れている。すなわち宗族や血縁などを強く意識しているとは思われない。現在の関係を意識する傾向があるように思われる。

ウリの一番外側にある知人は、過去の事実に基づいて関係が固定されている血縁・地縁・学縁とは異なる。すなわち現在の利害関係から成立している知人との関係は流動的であり不安定である。日本人にはその感覚はなく理解ができないのだが、韓国人は見も知らぬ人同士の間には深い溝があると考えられる。その関係をウリ内に留めようとする場合には、溝を埋めるためにそれなりに情を注ぎ込まなくてはならないと考える⁶⁾。たとえば、お互いに会食・贈り物・頼み事・プマシ⁷⁾あるいは迷惑を掛け合うなどである。そうしないと関係が薄れて行く。それがなくなると知人は次第にウリからナムの関係に戻ってしまう。その意味でウリとしての知人も相対的である。筆者は、若者が学校の先輩・後輩、先生、友人と日本人には不思議と思えるほど、親密に付き合うのはこのような背景があると考えられる。たとえば、女子大生が寮に入ると、同室の後輩は先輩をオンニ（姉）、先輩は後輩をトンセン（妹）と呼び、仲のいい姉妹のように助け合う。男子学生の場合も、後輩は先輩を

ヒョン (兄)、先輩は後輩をトンセン (弟) と呼ぶ。下着・歯ブラシや冷蔵庫の食べ物もどちらの所有物か区別がつかなくなる。女性同士はよく手をつないで歩く。男性も日本人よりは接触する傾向にある。韓国では男女とも日本より接触文化である。

ウリにある人には、儒教文化が支配し敬語を使うべき時は敬語を使い、礼を尽くすべき時は礼を尽くす。親密になればなるほど本音で話す。親しい友人同士では甘えあう。迷惑をかけることができる間柄が本当の親友である。これは韓国流の「甘えの構造」である。

ウリに対して、ソトにいる人々はナムと呼ばれている。ウリという言葉は韓国人の間では頻繁に使われるが、ナムというのは特に頻繁には使われない。その意味で必ずしもウリの正反対の言葉でないかもしれない。ナムとは無関係な人・赤の他人で、彼らがどうなろうと関心がない。韓国人は、ナムに対しては、一般に排他的、無礼、冷淡で道徳がない。そして彼らを信じない。ただし実際にコミュニケーションをすることになれば、単に建て前でそれなりにそっけなく応じる。年令秩序を示すことはある。ただし相手の発する言動には特に関心がない。

客観的に見て、ウリ同士は熱く感じるが、ナム同士は相当冷たい。日本の見知らぬ人に対する以上の冷たさを感じる。筆者の限られた範囲の経験ではあるが、たとえばビルのエレベーター内で遠くにいて目的階のボタンを押したい時、なかなかボタンの近くの見知らぬ人に言えなく自分で押さなければならず、逆にボタンの近くの人は見知らぬ人にも何階ですか？と聞きもしない。あるいは結婚式の同じテーブルの席に着いているのに、自分の写真を撮ってもらいたい

時、隣の見知らぬ人にカメラのシャッターを押してくれませんか？と依頼しにくい雰囲気であり、周囲の人も今まさに自分の写真を撮りたがっている人にシャッター押してあげましょうか？と言おうともしない。このようなことを経験すると、韓国では見知らぬ人同士の間にはやはり深い溝があるのか、と感ずるようになる。上記のように、韓国ではこの溝を埋めるため事前に情を注入しないと親しくなれない。筆者は、日本ではこのような冷たさを感じたことがない。日本では、長距離列車とか酒場で偶然隣に座った見知らぬ人とも知合いになり話が弾むことはままある。韓国ではこのようなことはまずないと言える⁸⁾。

筆者は、ナムの中には「敵対する人たち」が含まれると考えている。その典型として宗族同士が争う場合がある。たとえば李王朝末期の権力争いをした安東金一族と豊壤趙一族のように一門の命運を賭けて宗族同士が争う場合は、お互いナムになる。また姻戚同士でもナムになることがある。同じく李王朝末期に明成皇后すなわち閔妃 (1851—1895) は、自分の夫の第26代国王高宗 (命福) の父君、興宣大院君 (通常単に大院君) と権力争いを繰り返した。高宗が11才という異例の若さで国王の地位に着いたため、大院君が後見人として政治に参加し権力を手に入れた。その後閔妃一族が次第に実権を掌握していった。閔妃は、王妃として豪胆果敢な独裁者大院君を敵にまわし、露・清・日など諸外国を舌端で翻弄し、国運を賭けて戦い抜いた類いまれなる才智を以て君臨した美貌の王妃である。両者の間に何もなければ、本来はウリ同士になるはずが、閔妃および姻戚関係にある閔一族と大院君は政敵となり権力闘争を広げ、ナ

ム同士になったのである⁹⁾。歴史的にみると朝鮮半島では、国が一つにまとまり外敵から護らなければならない肝心の時に、自分の家門の名誉を護るため、宗族同士が政敵すなわちなム同士となり、内紛を起こし、国を護れないことが実に多い。

韓国人に限らず、どの国民もそのような傾向があるが、韓国人にも、相反する評価がある。それは、①親和力がある—団結力が弱い、②依頼意識が強い—競争意識が強い、③道徳と礼節の重視—虚礼虚飾の横行、④お互いに助け合う—一体面と見栄に固執、⑤親切だ—マナーがない・乱暴だ、⑥情けが厚い—独善的だ、⑦開放的だ—韓国は韓国人だけのための国、である¹⁰⁾。大方前半の特徴がウリに対する対応の仕方、後半の特徴がナムに対する対応の仕方と考えられる。韓国ではウリに対する対応とナムに対する対応が極端に変わる。

おわりに

在韩国日系企業でのアンケートを使用した本研究では、まず日本人従業員および韓国人従業員からの回答では、いずれも日韓異文化コミュニケーションという特有の現象と特に日韓というわけではなく異文化コミュニケーション一般に起こり得る現象の二つがある。そして韓国人間のコミュニケーションには、「ウリ」と呼ばれるウチ集団に対するスタイルと「ナム」と呼ばれるソト集団に対するスタイルがある。ウリの概念は政治・経済・社会の状況、地域、性別、年代、時代などにより変化し得るものである。現在の韓国は、南北の対立はあるものの経済的には相当に発展し、生活水準も向上している。

そのような中であっては、血縁・地縁・学縁という固有のつながりよりも会社の同僚、取引相手、趣味仲間、メル友のような現在の繋がりを大切にしている傾向がある。

「ナム」については、日本の「余所者」、中国の「外人（ワイレン）」と類似している。それぞれ冷たい関係であるが、冷たさが異なる。俗な表現では温度差があるように思う。科学的に証明するのは難しいが、筆者の直観では、日本の「余所者」は、日本ではよく「水くさい」と言うように「水」のような冷たさであろう。中国の「外人」は、筆者の知る多くの中国人が「中国の人間関係は氷のように冷たい」と言うように「氷」のような非常に冷たさであろう。筆者は、韓国の「ナム」は両者の間で「氷水（氷が入った水）」の関係であろうと考える。この場合の「氷」は多分韓国人が考える「溝」と想定できる。そしてこの氷を溶かすために「情」の注入が必要なのである。中国での外人関係における「氷」は硬くて溶かすのが容易ではない。この氷は簡単には埋められない巨大な「溝」なのではないかと思う。通常の日本人は、韓国人や中国人の感じている「溝」を考えたこともない。日本人同士なら、そのような「氷」がないので溶かす必要もなく友人関係になれるし、信頼関係を築くことができると考えている。

結局のところ、韓国人の「ウリ」に対するコミュニケーションは、礼をつくすべき時はつくすが、本音で、遠慮のない、迷惑が掛けられる、甘えられる、情けが深いスタイルで行われる。反対に、韓国人の「ナム」に対するコミュニケーションは、建前で、甘えられない、情けがない、冷たい、相手に無関心なスタイルで行われると言ってよい。

なお筆者は、日本の「余所者」、韓国の「ナム」、中国の「外人（ワイレン）」を整理してもう少し詳しく比較しようと考えている。韓国については日本からの視点だけでなく、中国からの視点も大切である。韓国は、陸続きであるためと当然と思われるが、実は基幹のところでは中国と共通点・類似点が多い。これらの比較については今後も検討を続ける予定である。

注

- 1) 異文化コミュニケーション研究は、1960年ころよりミネソタ大学、ウィスコンシン大学、イリノイ大学、ミシガン大学といったアメリカ中西部の大学から始まり全米に広がり現在に至っている。日本では、当初からしばらく理論研究は未発達であり、その間日本の若い研究者達がアメリカに学びに行った。日本における「異文化コミュニケーション」の理論研究は、比較的新しく1997年2月に神戸外語大学異文化コミュニケーション研究所の発案で「異文化コミュニケーション理論構築研究会」が組織されたのが始まりである。その主要なメンバーであった石井敏や久米昭元などによりその成果として『異文化コミュニケーションの理論』有斐閣（2002年）が出版されたのは、わずか数年前のことである。また最近この続編と言える『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣（2005年）が出版された。彼らは従来の理論を纏め、さらに独自の理論を提示した。しかしこれらの理論は日韓異文化コミュニケーションとか日中異文化コミュニケーションといった具体的な事例に対しどれだけカバーし切れるであろうか？という疑問は残る。
- 2) 「門中」という言葉は、日本の沖縄にもある。『広辞苑 [第五版]』(岩波書店)によれば、「沖縄で、同族の結合体をいう。地域的なつながりが強く、共同の墓（門中墓）がある」。韓国の「門中」と沖縄の「門中」は、当然関連があると考えられるが、どちらからどちらへ、どのように伝わったのか不明である。
- 3) Googleによれば、韓国統計庁2001年の統計で、中学卒業者に対する大学進学率は、男子72.3%、女子67.3%とある。ただし、韓国の各種統計により、大学進学率が約50%から80%強まで一定しない。
- 4) 「理」の世界は、「情け無用」の厳しい世界、「気」の世界は「情け深い」おおらかな世界である。韓国人は場に応じて、「理」の世界と「気」の世界を、瞬時に使い分ける。韓国での「理」と「気」の詳細は、小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』講談社、1998年を参照。
- 5) 最近の韓国の一人あたりの国民所得は、2001年：US\$10,580、2002年：US\$11,280、2003年：US\$12,030である。ちなみに日本は、2001年：US\$35,780、2002年：US\$33,660、2003年：US\$34,180である。長期的には日本は、韓国に追いつかれる傾向にある。出所：『世界国勢図会』矢野恒太記念会、2005年。
- 6) 詳細は古田博司『朝鮮民族を読み解く』筑摩書房、1995年、25頁参照。
- 7) 元々は農繁期における労働の貸し借りをいう（古田、同上、120-129頁）。農業以外においてもこれを種々の場合に応用できること。しかし都会では徐々に薄れているらしい。
- 8) 李圭泰著 尹淑姫・岡田聡訳『韓国人の情緒構造』新潮社、1995年。
- 9) 李王朝末期における両者の対立および宗族内外の内紛については、角田房子『閔妃暗殺』新潮社、1988年が詳しい。ただし今回の筆者の韓国滞在中に、一部の韓国人識者から、姻戚関係の対立あるいは血縁関係にある対立をナム同士というのが妥当かどうか分からないとのコメントがあった。
- 10) 小針進『韓国と韓国人』平凡社、1999年、190頁。

参 考 文 献

- ・秋月望・丹羽泉編著『韓国百科』大修館書店, 1996年
- ・伊藤亜人『韓国』河出書房新社, 1996年
- ・薄木秀夫『韓国人の本心』東洋経済新報社, 1996年
- ・禹守根『韓国人ウ君の「日韓の壁」って何だろう』講談社, 2003年
- ・大崎正瑠『韓国人とつきあう法』筑摩書房, 1998年(ちくま新書)
- ・小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』講談社, 1998年(現代新書)
- ・————『韓国人のしくみ』講談社, 2001年(現代新書)
- ・金敬勲編著 梁泰昊訳『韓国が変わる』亜紀書房, 1995年
- ・金容権編著『韓国を知る事典』東海教育研究所, 2002年
- ・黒田勝弘『韓国人の歴史観』文芸春秋, 1999年(文春新書)
- ・————『韓国人の発想』徳間書店, 1993年(徳間文庫)
- ・呉 善花『ワサビと唐辛子』祥伝社, 1995年
- ・————『韓国併合への道』文芸春秋, 2000年(文春新書)
- ・小針進『韓国と韓国人』平凡社, 1999年(平凡社新書)
- ・関川夏央『ソウルの練習問題』新潮社, 1988年
- ・角田房子『閔妃暗殺』新潮社, 1988年(新潮文庫)
- ・中村欽哉『韓国人が身勝手に見える理由』三交社, 1996年
- ・バード, イザベラ著 時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社, 1998年(学術文庫)
- ・深川由紀子『図解 韓国のしくみ』中経出版, 1999年
- ・古田博司『朝鮮民族を読み解く』筑摩書房, 1995年(ちくま新書)
- ・————『ソウルという異郷で』人間の科学社, 1988年
- ・水野俊平『韓国の若者を知りたい』岩波書店, 2003年(ジュニア新書)
- ・李圭泰著 尹淑姫・岡田聡訳『韓国人の情緒構造』新潮社, 1995年
- ・渡辺吉鎔『はじめての朝鮮語』講談社, 1983年(現代新書)
- ・————『韓国言語風景』岩波書店, 1996年(岩波新書)
- ・Cha, Jae-Ho, "Aspects of Individualism and Collectivism in Korea" in Uichol Kim et al. (eds) *Individualism and Collectivism*, Thousand Oak: Sage Publications, 1994
- ・Han, Gyuseog and Sug-man Choe, "Effects of Family, Region, and School Network Ties on Interpersonal Intentions and the Analysis of Network Activities in Korea" in Uichol Kim et al. (eds) *Individualism and Collectivism*, Thousand Oak: Sage Publications, 1994

本研究は、2005年度東京経済大学研究助成費(1B05-01)で行った研究成果の一部である。